

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：24701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593452

研究課題名(和文) 児童虐待による一時保護児童と家族の親子再統合に向けての子育て支援プログラム

研究課題名(英文) The Parenting Program towards the Reintegration of abused children in temporary care and their parents

研究代表者

柳川 敏彦 (Yanagawa, Toshihiko)

和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授

研究者番号：80191146

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、児童虐待の再発防止(3次予防)の観点から、1. 全国児童相談所の親子再統合に関する調査を行うこと。2. 前向き子育てプログラムの導入とその有用性の評価の2点である。

平成24年度の全国225か所児童相談所(回収率56.4%)の調査では、介入型虐待ソーシャルワークの枠組み(サインズオブセーフティスアプローチ)が多くの相談所で採用されていた。平成25,26年度は、4地域の児童相談所(30人、うち修了28人)においてトリプルPを実践した。トリプルPは、親の心理教育面、子どもへの不適切行為の減少において有用であり、特に主たる虐待タイプが身体的虐待の養育者に有用であった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was performed on the view of third prevention for the child abuse and neglect (CAN). 1. The questionnaire survey: 225 child guidance centers in the nation about the reintegration of abused children in temporary care and their parents. 2. The implementation and evaluation of Triple P-Positive Parenting Program for abusive parents of child maltreatment in the child guidance center.

The response rate was 56.4% in 2012 nationwide survey, we found that many child guidance centers has employed "The Signs of Safety Approach" which was known as the social-work intervention framework for CAN. We applied Triple P to the 30 parents (28 parents completed the 8 weeks program) in 4 child guidance centers in 2013 and 2014. Triple P showed the positive effects for the parental psychoeducational factors and also decreased problem behavior in their children, especially Triple P showed greater effects for the parents who acted mainly physical type of CAN.

研究分野：小児科学、小児神経学、小児保健学

キーワード：児童虐待 親子再統合 児童虐待再発予防 児童相談所 子育て支援プログラム

1. 研究開始当初の背景

(1) 急増しつつある児童虐待に対して、児童虐待の防止等に関する法律(以下、児童虐待防止法)における第十一条「指導を受ける義務」、第十三条「児童福祉司等の意見の聴取」では、児童福祉司等による指導を保護者が受けるよう義務付けられ、施設入所措置を解除する際には児童福祉司の意見を聞き、指導や勧告に従わないと措置解除しないとされている。しかし、児童虐待の再発予防に対する具体的、かつ効果的対応策が示されていない現状がある。

(2) 子育てと児童虐待の関係においては、幼児健康度調査(日本小児保健協会実施)によると、育児に自信が持てない、困難を感じる母親が約 30%いることが報告され、育児不安の第 1 心性である「自信のなさ、心配、困惑、母親としての不適格感」が示されている。そして約 18%の母親が、「虐待をしているのではないかと思う」と答え、育児不安の第 2 の心性である「ネガティブな感情、攻撃、衝撃性」が表れている。この 2 つの心性は、虐待と強い相関を持っているといわれ、育児不安そのものが子ども虐待へのハイリスク要因となる。

2. 研究の目的

児童虐待の予防は、すべての養育者を対象とする一次予防、虐待ハイリスクにある養育者(若年、独り親、経済的困窮など)を対象とする二次予防、そしてすでに虐待が発生した場合、再発を防ぐため加害養育者を対象とする三次予防がある。本研究は、児童虐待の再発防止(3 次予防)の観点から以下の 2 つを目的とする。

- (1) 全国児童相談所の親子再統合に関する調査を行うこと。
- (2) 前向き子育てプログラム(トリプル P)の導入とその有用性の評価すること。

3. 研究の方法

(1) 全国児童相談所 225 か所に児童虐待による一時保護児童と家族の親子再統合に関する質問を平成 24 年 6 月~8 月に郵送法にて行った。内容は 22 年度または 23 年度に各児童相談所で扱った一時保護児童の人数、虐待の種類等と一時保護後の処遇、および各施設の対応状況である。(平成 24 年度)

(2)- 対象: これまで研究者は、児童虐待 1 次予防として地域の養育者を対象にトリプル P を実施し、また 2 次予防で自閉症スペクトラム障害の児を持つ養育者を対象にトリプル P を実施し、それぞれの有用性を報告してきた。今回は、3 次予防の観点で 4 つの児童相談所において、児童虐待により一次保護に至った児の養育者 30 名を対象とし標準トリプル P を実施した。標準トリプル P は、5 - 10 名の母親グループで実施し、1 セッ

ション 2 時間を 1 週毎に行う計 8 週間(5 回のグループセッション、3 回の個別電話相談)のプログラムである。(平成 25 年度)
 (2)- 分析内容: 子どもの状態について SDQ(子どもの長所・短所質問票)、親について PS(子育てスタイル) DASS(うつ・不安・ストレスなどの精神状態)、PSBC(子育ての自信)、子どもへの不適切な行為(JM17)、子育てスキルの使用頻度、プログラム満足度の 7 種類について分析を行った。(平成 26 年度)

4. 研究成果

(1)-1 アンケートの回収は 127 か所(56.4%)であった。平成 22 年度と 23 年度に 127 か所で経験した被虐待児童は、35,944 名で男 52.2%女 47.8%であった。不明分を除いた 34,793 名において虐待タイプの内訳は、身体的虐待 35.0%、ネグレクト 31.8%、心理的虐待 28.9%、性的虐待 4.3%であった。一時保護児童は、9,224 名で、調査時点での処遇判明者は 8,824 名で、児童の生活場面は、自宅 52.4%、児童福祉施設等入所中 27.0%、一時保護施設入所中 8.1%、入所解除 6.7%、里親 3.6%、自宅以外親族 1.6%、その他 0.6%であった。

(1)-2 回収した 127 児童相談所のうち 122 か所から、児童福祉司等による児童相談所の対応について回答があった。面談による指導対象は、方針として「必ず両親」60.4%、「主に虐待加害者」27.7%であるが、現状は、母親のみ 38.8%、父親のみ 0%、両親 1.0%、記入なし 60.2%であった。家族支援プログラムの導入は、方針として「必ず両親」46.7%、「主に虐待加害者」40%であるが、現状は、母親のみ 45%、父親のみ 0%、記入なし 55%であった。

(1)-3 親子再統合を目的とした家族支援の内容は、主に カウンセリング、ソーシャルワークの枠組み、ペアレンティング・ペアレントトレーニングに分類することができた。現状の児童相談所では、具体的な方法を模索しているところが多く、サインズ・オブ・セイフティ・アプローチ(SoSA)、あるいは SoSA を部分的に利用、段階的親子再接触などのソーシャルワークとしての枠組み利用しているところが多く、実践としての育児プログラムの導入は散見される程度であった。今後必要な枠組みを図 1 に示す。

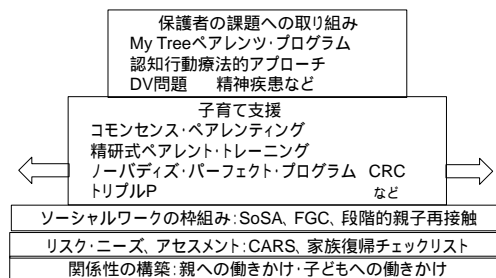


図 1. 多面的な対応の必要性(領域・専門性)

(2)-1 研究参加者属性：標準トリプル P を終了した保護者 28 名（実母 26 名、継母 1 名、実父 1 名）を分析対象とした。保護者の平均年齢は 39.2 歳で、子どもの平均年齢は 7.2 歳であった。主たる虐待のタイプは身体的虐待 13 名、心理的 11 名、ネグレクト 4 名（単独 13 名、合併 15 名）であった。28 名中 7 名が一時保護され、15 名が発達の問題を持っていた。養育する親においても、28 名中 12 名で、発達障害や心理・精神的不安定等を示していた。

(2)-2 トリプル P 実施結果：主たる虐待のタイプが身体的虐待である A 群 13 名とネグレクト+心理的虐待 B 群 15 名の 2 群に分け、全体および 2 群のプログラム前後の比較検討を行った。

SDQ において、全体 28 名で難しさの合計、情緒問題、行動問題、過剰活発で有意な改善が得られ、A 群では過剰活発、B 群では難しさの合計、情緒問題、社交性で有意に改善した。

表 1. SDQ: プログラム前後比較

SDQ	全体 n=28		A群 n=13		B群 n=15	
	前	後	前	後	前	後
難しさの合計	19.18	14.54	20.23	15.92	18.27	13.33
情緒問題	3.68	2.29	2.85	1.92	4.4	2.6
行動問題	5.36	3.82	5.92	4.38	4.87	3.33
過剰活発	6.21	5.21	7.54	6.31	4.93	4.27
交友問題	3.93	3.21	3.92	3.31	3.93	3.13
社交性	4.57	5.61	4.54	4.92	4.60	6.20

数字は、それぞれのスコアの平均値

注) 社交性は得点の高いものが良好。それ以外の要素は、得点の高いものが困難性を示し、合計は社交性を除いた総和。灰色塗りつぶしは、前後で有意差のあったことを示す。

PS では、全体、A 群、B 群とも手ぬるさ、過剰反応、多弁、総合スコアのすべてにおいて有意に改善した。

表 2. PS: プログラム前後比較

PS	全体		A群		B群	
	前	後	前	後	前	後
手ぬるさ	4.23	3.20	3.92	3.25	4.50	3.16
過剰反応	4.99	3.76	5.26	3.98	4.75	3.57
多弁さ	4.67	3.53	4.43	3.49	4.88	3.55
総合スコア	4.54	3.42	4.48	3.51	4.59	3.34

注) すべての項目で、得点の高いものが困難性（臨床域）を示す。

DASS では、全体で不安、ストレス、総計の改善が得られ、A 群で総計、ストレスの改善が得られたが、B 群では下位項目で有意な改善は得られなかった。

表 3. DASS: プログラム前後比較

DASS	全体		A群		B群	
	前	後	前	後	前	後
抑うつ	8.11	5.86	5.38	4.69	10.47	6.87
不安	5.32	3.79	4.23	3.54	6.27	4.00
ストレス	13.68	9.07	14.00	8.23	13.40	9.80
合計	27.11	18.71	23.62	16.46	30.13	20.67

注) すべての項目で、得点の高いものが困難性（臨床域）を示す。

PSBC では、虐待のタイプに関係なく有意な改善が得られた。

表 4. PSBC: プログラム前後比較

PSBC合計	全体		A群		B群	
	前	後	前	後	前	後
	154.61	197.57	155.85	190.31	153.53	203.87

注) 値は、高値が良好を示す。

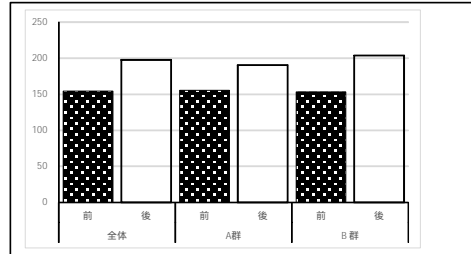


図 2. PSBC: プログラム前後比較

プログラムスキルでは、「子どもとの建設的な関係をつくる」、「子どもの好ましい行動を育てる」などの子どもの発達を促すスキルが多用された。

表 5. 17 の子育てスキルの使用頻度

子どもを(描写的に)ほめる	6.6
子どもと良質な時を共有する	6.5
子どもと話す	6.4
愛情を表現する	6.4
はっきりした穏やかな指示	6.2
理にかなった結果	6.1
子どもに注目している気持ちを伝える	6.1
基本ルール	6.0
アスク、セイ、ドウ	6.0
会話による指導	6.0
適時を利用して教える	6.0
計画的な無視	5.9
行動チェック	5.9
よい手本を示す	5.8
一生懸命になれる活動を与える	5.7
タイムアウト	5.2
クワイエットタイム	5.0

注) 数字は、7 点満点での使用頻度を示す。

プログラムの満足度、有用性ともに高いものであったが、「パートナーとの関係性の改善」の評価は、7 段階中の 4.0 にとどまった。

表 6. プログラム満足度

今回、あなたとあなたの子どもが受けたサービスの質はどのようでしたか？	6.4
全体的にみて、あなたは今回受けたプログラムにどの程度満足していますか？	6.3
あなたの子どもをより効果的に扱うのにこのプログラムは役立ちましたか？	6.0
あなたとあなたの子どもがこのプログラムから受けた援助にどのくらい満足しましたか？	6.0
もしもう一度援助が必要になったとき、またトリプル P を受けますか？	6.0
あなたはプログラムから期待していた援助を得ましたか？	5.8
あなたに必要なことにこのプログラムはどの程度合っていましたか？	5.6
あなたのご家族に生じた問題をより効果的に扱うのにこのプログラムは役立ちましたか？	5.6
あなたの判断で、今あなたの子どもに行動についてどのように思いますか？	5.5
あなたの子どもに必要なことにこのプログラムはどの程度合っていましたか？	5.5
あなたの子ども達の進歩・成長(変化)について、現時点であなたはどのように感じていますか？	5.2
あなたの家族の他のメンバーに対し、プログラムのスキルを応用することができましたか？	4.8
プログラムにより、あなたとあなたのパートナーとの関係は改善されたと思いますか？	4.0

注) 数字は、7 点満点での満足度を示す。

子どもへの不適切な行為 JM17 は、プログラム施行前 A 群が B 群に比べ有意に高値を示した。プログラム前後比較は全体、A 群、B 群とも有意な減少が得られた。

表 7. JM 17 : プログラム前後比較

	全体		A群		B群	
	前	後	前	後	前	後
JM17	11.73	7.73	14.20	7.70	9.67	7.75

注) 得点の高いものが困難性を示す。

(2)-3 子ども虐待による被虐待児の一時保護を考慮された保護者に対し、トリプル P は、親の心理教育面、子どもへの不適切行為の減少において有用であった。特に、主たる虐待タイプが身体的虐待の保護者に有用であった。トリプル P は、親子再統合を目的とした家族支援プログラムとして期待された。

<引用文献>

(1) 柳川敏彦, 平尾恭子, 加藤則子ら: 児童虐待予防のためのペアレンティング・プログラムの評価. に関する研究. 子ども虐待とネグレクト 11, 54-68, 2009

(2) 柳川敏彦, 平尾恭子, 加藤則子ら: 「自閉症スペクトラム障害の子どもたちの家族のためのペアレント・プログラムの実践 - グループ・ステッピングストーンズ・トリプル P の効果について - 」子ども虐待とネグレクト, 14(2)135-152, 2012

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

Toshihiko Yanagawa: Study of the implementation and effectiveness of Triple P-Positive Parenting Program for abusive parents of child maltreatment in the child guidance center. The 20th ISPCAN international congress. Nagoya, 2014 年 9 月

Junko Nojiri, Toshihiko Yanagawa : The support for parents who have children with suspected autistic spectrum disorder on infants' medical checkup~The study for the effects of the Triple P - Positive Parenting Program during pre-school age ~. The 20th ISPCAN international congress. Nagoya, 2014 年 9 月

柳川敏彦: 児童虐待による一時保護児童と家族の親子再統合に関する研究 - 全国児童相談所のアンケートによる現況調査 - . 第 19 回日本子ども虐待防止学会. 松本市, 2013 年 12 月

6. 研究組織

(1)研究代表者

柳川 敏彦 (YANAGAWA Toshihiko)
和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授
研究者番号: 80191146

(2)分担研究者

加藤 則子 (KATO Noriko)
国立保健医療科学院・教育・総合科学学術院・部長
研究者番号: 30150171

上野 昌江 (UENO Masae)

大阪府立大学・看護学部・教授

研究者番号: 70264827

(3)研究協力者

山田 和子 (YAMADA Kazuko)

和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授

研究者番号: 10300922